

遊女の血縁・往生譚と今様

大木, 桃子
熊本学園大学非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/8920>

出版情報 : 語文研究. 99, pp.12-27, 2005-06-30. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

遊女の血縁・往生譚と今様

大 木 桃 子

はじめに

今様を歌って遊女が僧に結縁する、或いは往生するといふ話が説話集や絵巻の絵詞に見られる。それらの説話群の中で、遊女及び今様はどのように位置付けられるものであろうか。

「推参」といふ言葉を手掛かりに遊女・傀儡の芸能を分析する阿部泰郎は、特に漢詩文において見られる彼女らに対する男性知識人の批判的なまなざしは、彼女たちに魅了され誘惑されることを免れない自分たちの姿の裏返しであり、彼らの知的所作であるに過ぎないと述べ、翻つて日記・記録・説話集の類に関しては男性の遊女観を肯定的に捉えている。氏によれば巫女の芸能もまた遊女と同様に機能しているらしい。^(注1)

氏の論を踏まえながらこの問題をさらに検討してみたい。血縁・往生譚における遊女の今様の役割や意味を、巫女や男性のそれと比較するとき、やや異なつた様相が見えてくるように思われる。

(一)

知恩院蔵『法然上人絵伝』には、四国に配流される途中、室の泊に寄港した上人の船に、遊女が結縁を求めて近づいてくるといふくだりがある(巻三十四・五段)。水辺の遊女の姿を生き生きと伝える絵で有名である。舳先近くに座る遊女は小脇に鼓を抱える。後ろから傘を差しかける遊女。そして櫓を操るのも遊女である。この絵は『梁塵秘抄』巻二・四句

神歌雜に歌われる遊女の姿そのままである。

遊女の好むもの 雜芸鼓小端舟 簀翳臚取女 男の愛祈
る百大夫(380)

繪詞は女人血縁譚として名高い。直前の四段に、漁師の老夫婦が自らの罪業を嘆いて上人に救いを求める話が載っており、遊女は漁師と共に、罪深いものの筆頭として描かれている。その遊女であつてさえも、念仏を唱えれば極楽往生できるとというのが、この話の主題である。歌を歌つたとは書かれていないが、座っている遊女が右手で鼓を打っているのがわかる。たぶん今様を歌っているのだらう。

軌空による法然上人の最初の伝記繪卷『伝法繪流通』は散逸しているが、善導寺本『本朝祖師伝記繪詞』、高田本『法然上人伝法繪』などに伝写されている。それらにおいて同場面は「君たちまいり(侍)けり」とあるだけで、遊女の懺悔も上人の教化もないのだが、想起される遊女の血縁、往生他の話が記され、その際に歌われた歌も書き留められている。その影響下に成つた『拾遺古徳伝』では、上人の説法が加わり、挿話がさらに詳しくなる。

むろのとまりにつきたまひければ、遊君どもまいりあつ
まりて、往生極楽のみちわれもくとたつねまつしけり。
むかし小松の天皇光孝天皇
これなり八人のひめみやを七道につかは

しけるより、遊君いまにたえず。あるとき天王寺の別當僧正行拜堂のためにくだられける日、江口神崎の遊女ふねをちかくさしよせければ、僧の御ふねにみぐるしくといひければ、神楽をぞうたひいだしはんべりける。「有漏地より无漏地にかよふ釈迦だにも、羅喉羅のははありとこそきけ」と、僧正めでさまぐ纏頭したまひけり。なかごろのことにや、少将の上人なかのかは
の本願實範ときこえしひと、かのとまりをこぎすぎたまふことありけるに、遊女ふねをさしうかべて、「くらきよりくらきみちにぞいりぬべき、はるかにてらせやまのはのつき」と、くりかへしく三遍うたひてこぎかへりけるこそあはれにおぼえはんべれ。またおなじきとまりの長者、とねくろやまひにしづみけるとき、最後のいまやうに、「なにしにわが身のおひにけん、おもへばいとこそかなしけれ、いまは西方極楽の弥陀のちかひをたのむべし」とうたひければ、紫雲つみにそびき、音楽まつにこたへて往生をとげり。いにしへもこのとまりには、かゝるためしどもはんべれば、いまもこの聖人にみちびかれたてまつらんことうたがひなしとて、よろこびつゝまいりけるなかに(以下、説法略)

ここに載せられた三つの挿話のうち行尊の話は法然の伝記

以外に見えないものである。歌も歌集や歌謡集の中に全く見出すことができない。「お釈迦様になつて出家前には耶輸陀羅（羅摩羅の母）という后がいたと聞いておりますよ。室の泊にいる私たちが上人様のお船に近づいたつていいでしょう」というほどの意味になるだろうか。『新勅撰和歌集』巻十釈教歌の、

土佐国室戸といふところにて

弘法大師

法性のむろといへどわがすめばうめの浪風よせぬ日ぞ

なき（574）

や

『公義集』の、

うろぢより入りにしむろのとまり舟法にもとまる心離よ

（274）

から類推できるように无漏には地名「室」が掛けられている。『拾遺古徳伝』及び善導寺本、高田本、いずれも江口神崎の遊女となっているが、掛詞の点からも、また室の泊が遊女の血縁・往生の「名所」であるという認識に基づいて書かれているという本文の文脈上からも、播磨の室津の話と読まねばならないところである。

「釈迦」には、坂（境界）の意味も込められているだろう。そうすると、「有漏地より无漏地にかよふ」が生きてくる。

ともあれこれは、遊女が、罪深いと言われる自分の立場を正当化した内容の歌と解釈できるのである。阿部も指摘するように思い出されるのが、『後拾遺和歌集』巻二十維六の遊女宮木の歌である。

書写のひじり結縁供養し侍けるに人人あまたふせおくりはべりけるなかもふ心やありけんしばしとらざりければよめる
遊女宮木

つのおくのなにはのことかのりならぬあそびたはぶれま
でとこそきけ（1197）

歌謡でなく和歌であるが、状況設定が『拾遺古徳伝』と似ている。歌自体も、「とこそきけ」という結びが共通しているだけでなく、何は「難波」という掛詞を用いながら、「童子の遊戯だつて法に背かないと聞いておりますよ」と他を引き合いに出して、自分の立場を主張する点も同工異曲である。

滝川政次郎の指摘によれば、遊女宮木の墓の存在が『撰津名所図会』に記される。滝川は墓の存在を確認できなかったと言つが、『図会』に言つ墓の由来が興味深い。建永二年讃岐に向かう法然上人の船に宮城が血縁を願つて近づき、上人が確約して念仏を唱えたところ、宮城を含む五人の遊女が入水した。その亡骸を葬つて遊女塚なるものを築いたといつのである。『新猿楽記』では歌のうまさ（文脈上歌謡であらう）

を讚美され、『遊女記』に蟹島の中心となる人物と書かれる宮城は、また『二中曆』に名を留める名妓でもあった。^(注)性空と交流があったということから十世紀に活躍したと思われ、法然に結縁を求めるといふことはもちろん考えられない。しかし江戸時代の寛政年間にこのような逸話があったことは注目に値する。伝承の過程で人物の混同が起こったのであろうが、僧と遊女の結びつきの深さが伺えるからである。

少将の上人の話には類話がある。『発心集』巻六・十「室の泊の遊君、鄭曲を吟じて上人に結縁する事」である。『拾遺古徳伝』は少将の上人に「なかのかはの本願実範」と割注を付す。しかし『発心集』の少将の聖は源時叙（寂源）とされる。^(注)同じ「なかごころのこと」であるが、実範は天養元（一一四四）年没であり、時叙は生没年未詳ながら長和二（一一〇一—一三）年に大原勝林院を開いており、活躍の時期に約一世紀の隔たりがある。そこで『発心集』の「中比」の用例を調べると、ほぼ一〇〇〇年代に限定できることがわかる。実範と同時代の保延六（一一四〇）年没の鳥羽僧正は「近比」の人とされているのである。『発心集』の話はやはり時叙にふさわしい。

因みに勝林院は慈覚大師円仁が広めたとされる善導系の「不断念仏」が院政期以降定着した寺としても知られる。^(注)周

知のように法然は善導の著書を読んで開眼したと言われ、また文治二（一一八六）年には同寺で大原問答を行ったとされ、同寺との結びつきが伺える。この話は伝法絵系の本にはなく、『拾遺古徳伝』独自のものである。法然配流の時代の「なかごころ」には実範がふさわしいとも言えるが、『発心集』が典拠かもしくは同根であると思われ、法然との絡みからも『拾遺古徳伝』の話も時叙のことと読みたいところではある。これも時代が下って人物の転化が起こった例と見なせるだろう。

「くらきより」は『拾遺和歌集』哀傷や『和泉式部集』に、性空上人に遣わしたとして収められる歌である。と同時に、『古本説話集』『無名草子』などにみられるこの歌をめぐる話が想起される。つまり、返歌のかわりに性空上人が贈ってきた袈裟を、和泉式部が着て往生したというものである。阿部が指摘するように遊女が「くらきより」の歌を歌ったのも、こういった事情を背景にしているのだろう。外ならぬ和泉式部の、靈験効果を持つこの歌であったところに意味があるに相違ない。多情であったゆえ、「罪深かりぬ」と評される和泉式部と遊女との結び付きはこのような形でも見ることができるのである。

もう一度、『拾遺古徳伝』の「有漏地より」の歌に立ち戻つてみよう。遊女は「神楽」を歌つたとある。これはどういふことを意味するのだろうか。善導寺本や高田本では当該箇所が神歌となっている。神楽は神歌と同義であると考えて差し支えない。神事歌謡の、いわゆる「神楽歌」を神歌と記した例があるし、『梁塵秘抄』は二句神歌として、「神楽歌」採物の一首と同じものを収録する。^(注10)『梁塵秘抄』には四句神歌も収められているが、『口伝集』や他の文献で神歌と呼ばれているものは、一つの例外を除いてすべて二句形式であり、それが神歌としては本質的であると考えられている。

二句神歌が時として靈験効果を生み出すことは、『古今著聞集』巻六などの成通が物の怪を退散させた話や、『今物語』の袈裟巫女の神歌が八幡大菩薩の気持ちをも動かさし、娘の眼病を治癒に導いたという話から伺える。しかしそれらは必ずしも神歌として伝承されたというわけではなからう。

普通の和歌を「神歌に」歌つた例として、『散逸物語』をたえのぬま^(注11)に次の一節があつたことが、『風葉和歌集』(巻十四恋四)によって知られる。

たれともしらて物申ける女のいとたくひなくおほえ侍け

れはかならずこゝをたつぬへきさまにかたらひおきける所にゆきてもむなしうたちわつらひてふえふきつたなとうたひける末つかた「恋しなとはおるかなり」とふたかへりはかりのち神つたにうたひ侍ける

あぶことはまたなき中にいかなれば涙はかりの絶ぬなるらむ(1015)

これをきゝいたるもいとたへかたくて心のうちに

ないしのかみ

人はかく涙はかりをかこちけり我は命も絶ぬべき身そ
(1016)

松尾聡は、「神つたに」のところを「神歌の節で」と解釈し、「人聞きをばどかつて、女によびかけた歌ではないやうに装つたのである」とする。^(注12)「恋しなとはおるかなり」というのも、「恐らく神楽歌が何かであらう」とするが全容はわからない。

また『無名抄』に次の話がある。

富家の入道殿に俊頼朝臣候ひける日、かゞみの傀儡共参りて哥つかふまつりけるに、神哥に成りて、

世中は憂き身に添へる影なれや思ひ捨つれど離れざり
けり

此哥を歌ひ出たりければ、「俊頼、至り候ひにけりな」

とて居たりけるなん、いみじかりける。^(注)

俊頼の歌が神歌として伝承されていたのだろうか。傀儡が即興で神歌の旋律に乗せて歌った可能性もある。傀儡は忠実邸に門付けに来たと思われるが、「神哥に成りて」は、他の歌を歌った後神歌を歌う段になって、と解される。をたえのぬまの春宮大夫もさまざまな歌を歌った後、最後に神歌の旋律で自作の歌を歌ったのである。『梁塵秘抄口伝集』巻十（以下「口伝集」と略す）の、今様の練習や奉納などの場面に登場する曲名を検討すると、神歌は他の曲を歌った後、大曲の様と呼ばれる秘曲の直前に歌われていることがわかる。以上からも、神歌が人の心を揺さぶる独特の旋律を持ち、重視されていたと想像できるのである。

ここで再び遊女の歌に戻る。『拾遺古徳伝』の神楽（＝神歌）も、この歌がずっと神歌として伝えられてきたというより、神歌の旋律に乗せて、遊女が即興で歌ったと考える方が妥当ではなからうか。『発心集』の「くらきより」の歌も二句形式である。この話の題の中の「鄭曲」という言葉は用例を見ないが、郢曲の誤り（或いは、郢曲と同義で鄭曲という言葉があったか）とするところは広義の「今様」と同義と考えてよく、神歌も含まれる。「くらきより」の歌を神歌の調べに乗せて歌ったのではないだろうか。一章で和泉式部の和

歌の靈験譚との関係で論じたが、「歌われた歌」と言う側面から見ると、今様（神歌）の旋律の効果も見逃せない。『後拾遺和歌集』の宮木の歌も、「无漏地より」の歌との類似性から考えて、「神歌に」歌われた可能性^(注)がある。

遊女が血縁するのに、今様はその歌詞と旋律とで大いに貢献した。逆に言えば、今様という媒体がなければ成就し得なかったということではないだろうか。因みに血縁譚ではないが、「住吉物語」で、男君と共に京に向かう姫君の船に近く遊女の歌う歌は、

心からうぎたる船にのりそめて一日も波に濡れぬ日ぞなき

である。『後撰和歌集』巻十一恋三の小野小町の歌であり、やはり二句形式であるのが興味深い。

(三)

同じ遊女の今様でも往生の際に歌われるのは二句形式ではない。とねくろの話は『宝物集』巻七（七巻本系）、「口伝集」、「十訓抄」下十にも見え、流布していたと思われる。『宝物集』を引用する。

神崎の遊女とねくろは、年来色をこのみて、仏法の名字

をしらず、舟のうち、波の上にて世をわたる。往還の客に身をまかせてす。おとこにぐして西国へ下るほどに、海賊にあひて、数多所きられて、ひきいらんとしける時、西方にかきむけられて、

我等はなにしに老にけん、おもへばいとこそあはれなれ。今は西方極楽の、弥陀の誓を念ずべし。

といふ歌を、たびくつたひて、たゞよはりによはくならして、絶入にけり。西方よりほのかに楽の声きこえて、海上に紫雲たなびくといへり。

『梁塵秘抄』 卷一雑法文歌(235)とほぼ同じで、自らの罪業を悔いる歌である。とねくろを『十訓抄』は神崎の、『拾遺古徳伝』は室の遊女の長者とする。また『宝物集』、『十訓抄』の男に連れられて西国に下るといふ設定は、『千載和歌集』にその歌が入集する遊女戸々を思い起こさせる。

藤原仲実朝臣備中守にまかれりける時、ぐしてくだりけるを、おもひうすくならてのち、月をみてよみ侍りける

かずならぬみにも心のありがほにひとりも月をながめつるかな(819)

とねくろを西国へ伴つた男もおそらく受領階級の人物であつたのだらう。

前半部に水辺の遊女の生活の実態が詳しく描かれていることから遊女の研究に欠かせない資料でもある『藤の衣物話巻』であるが、伊藤祐子によつて現存部分の全貌が明らかにされている。^(注15)氏は画中詞が制作当時の口語を反映していると思われ、ことから絵画部分は室町中期の成立とし、詞書部分は平安時代の語彙・語法を引き継いでいることから元になつた物語があり、その成立を鎌倉時代である可能性が高いと見する。

遊女「かうしゅ」は、物語での帰りに立ち寄つた都の貴紳の一人の中の「若き人」と一夜の契りを結ぶ。若き人は形見の剣を残して去るが、その後便りもない。かうしゅは若き人の子どもを身籠つており、やがて女の子を産む。名も知れぬ若き人を思い続けていたかうしゅは、三年後体調を崩しあつてなく亡くなつてしまふ。以下はかうしゅの往生の場面である。^(注16)

心細きに添へても眺めまざる涙がちさを、かたへの者どももとかく慰むとて、端近く眺めぬたる夕つ方、入日を洗ふ沖つ白浪はるくくと風ぎ渡りて、辺りの浪も見かける絵の心地する程、歌うたひ朗詠などして、

沙羅や林樹の木の下に 隠ると人に見えしかど

といふ今様うたひて、浪に沈むかと思ゆる入日に向かひて眠るがごとくにて絶え果てぬ。海の面に紫の雲かすか

に移ろひて消え行く。空の色心細く、あはれなりともいふべき言の葉なくなむ、止まるかたへは思ひあへぬ。悲しむ末の露に遅るる長者が嘆き、言へばなのめならんや。「沙羅や林樹の木のもとに」の歌も『梁塵秘抄』巻二雑法文歌（191）で、下二句は、

靈鷲山の山の端に 月はのどけく照らすめり

である。往生に際して今様を歌うのが当然であるような筆致に注目したい。『梁塵秘抄』の原本では二句目が「かへると」となっており、諸注釈「帰ると」を当てるが、「かくると」の方が通りがよい。この絵巻により、誤写と指摘できるのではないだろうか。

二話に見える往生の時の音楽や紫雲は、仏の来迎の徴と理解され、典型的な表現といふことができる。例えば『日本往生極楽記』四〇坂田郡の女人の話には、

毎年に筑摩の江の蓮花を採りて、弥陀仏に供養したてまつり、偏に極楽を期せり。かくのごとくすること数年、命終るの時紫雲身に纏りぬ。

とある。『大日本国法華験記』巻下九〇にも、加賀の尋寂法師の入滅時に故郷の人が見た夢として、次の記述がある。

紫雲家に聳きて音楽空に満てり。尋寂聖人蓮華の台に坐して、空に昇りて去りぬとみたり。

『拾遺往生伝』巻中五の名前不詳の上人の焼身るときには、遙かに西方より、音楽徐くに来れり。（中略）遠くかの峰を望めば、翠煙上に騰りて、緑雲西に聳けり。とある。遊女の往生譚は念仏が今様に替わるといっただけで法華験記や往生伝の表現を踏襲している。

二者とも法文歌である。『口伝集』にはとねくろの話に続けて、高砂の君が「聖徳太子」の歌を歌って往生の願いを遂げたという記述がある。『梁塵秘抄』巻二・四句神歌（422）かとする注釈書が多いが、法文歌（220）であった可能性も捨て切れない。いずれにしても四句形式が選ばれている。歌の種類は異なるけれども、往生にも今様は不可欠であった。

『古事談』第三、『十訓抄』上三、『撰集抄』巻六に性空上人が生身の普賢菩薩を見たいと願い、神崎の遊女の長者を見るべしという夢想を得る話がある。やや趣を異にするが往生譚に加え得るだろう。『撰集抄』は性空の出家前の逸話を載せるが、後半部は前二者とほぼ同話である。『古事談』で、性空は、鼓を打ちながら乱拍子を歌う長者の姿を見る。

周防ムロツミノ中ナルミタラ 二風ハフカネドモササラ
ナミタツ云云

「奇異の思ひを成して」目をつぶると、長者は普賢菩薩に変

身し、歌は、

実相無漏の大海二五塵六欲之風八不^レ吹トモ、隨縁真如
之波タタヌトキナシト云云

と聞こえる。感激して上人が帰ろうとした時、決して口外する
など言い置いて遊女は頓死する。その時も極楽往生の兆候
があった。

『撰集抄』の場所は室となっている。

周防みたらしの沢辺に風の音づれて

と長者が歌つと居並ぶ遊女たちが、

さらさら波たつやれことつとつ

と囃した。目を塞いだ性空に普賢菩薩の姿が浮かび、

法性無漏の大海には普賢恒順の月の光ほがらか也

と聞こえる。この三つの説話と今様の関係については、馬場
光子の詳しい考察がある。^(注1)氏は、説話と地名の不一致に目を
向け次のように述べる。『古事談』『十訓抄』の室積は駅路の
客舎の意であり、同時に周防の海駅の地名でもある。説話の
地文中の神崎とは結びつかない。『撰集抄』の説話中の地名
室は遊女の地とすれば播磨の室津であるうが、「周防みたら
しの沢辺」と歌うばかりで地名を生かしきれていない。性空
上人説話から今様が直截生まれたとは考えにくく、説話と今
様は切り離して考えた方がよい。さらに歌の背景に仏典や

「浦褒め」の発想があることに言及した上で、遊女が土地と
旅人に対して予祝の意味を込めて歌った今様が、遊女普賢の
説話に取り込まれたと見る。今様は必ず「場」と共にあり、
そこには「場」を形作る集団があったといっているのである。本稿
一章で見た時代と共に変化した説話の登場人物同様、地名も
また伝承の過程で、移り変わっていくものであった。

私はこれらの説話に遊女の美声を強調する側面があること
を付け加えたい。遊女が歌っているのは五節の歌謡であり、
場所は神崎(室)であつても、宮中の五節の場面に酷似する。
遊女が五節に参加していたことは諸資料から知られるが、そ
れはよく指摘される遊女と宮廷の関わり深さを物語るもの
というよりは、むしろ彼女らのプロの芸能者としての力を示
しているように思われる。美声が尊重されたのは遊女に限ら
ない。『口伝集』で後白河院も歌の声に並々ならず執着し、
『梁塵秘抄』巻二・四句神歌(僧歌)には、

峰の花折る小大徳 面立よければ袈裟袈よし

まして高座に上りては 法の声こそ尊けれ(304)

と、美男で声のきれいな僧に対するあこがれを歌った歌があ
る。読経の声による感銘というより、諸注が指摘しているよ
うに、説経の場の芸能者的な美声と考えられる。芸能者、つ
まり歌手である遊女の美声が宗教的感銘を引き起こす作用を

持っていたゆえ、普賢菩薩の化身であるという神秘的な説話が生み出されたのであろう。

(四)

一連の遊女の血縁・往生譚に今様が欠かせないのを見てきたとおりである。いずれも今様の徳を語る説話と位置付けても差し支えないであろう。しかしそれは単純に遊女の地位、ひいては今様の価値を高めていることになるだろうか。阿部の指摘するように、貴族たちと遊女の関わりには否定的なニュアンスが見られないと言えるだろうか。

後白河院が、今様に一方ならぬ思い入れを持ち、遊女・傀儡子を集めて歌ったり、引退した傀儡子の乙前を師として特別に遇し、その死後も手厚く供養したりしたことは、『口伝集』によって知られる。また江口の遊女出身の女房丹波を寵愛し、産ませた皇子を天台座主（承仁法親王）に据えたこともよく知られている。しかし院は、『口伝集』に次のように記している。

我が身、五十余年を過ごし、夢のごし幻のごとし。既に半ばは過ぎにたり。今はよろづを抛げ棄てて、往生極楽をのぞまむと思ふ。たとひまた、今様をつたふとも、

などが蓮台の迎へにあづからざらむ。その故は、遊女のたぐひ、舟に乗りて波の上に浮び、流れに棹をさし、着物をかざり、色をこのみて、人の愛念をこのみ、歌をうたひても、よく聞かれんと思ふにより、ほかに他念なく、罪にしづみて、菩提の岸にいたらむことを知らず。それだに、一念の心おこしつれば、往生しにけり。まして我らはとこそおぼゆれ。法文の歌、聖教の文に離れたることなし。

往生の前提の中に「卑しい遊女であつてさえ」ということと、「仏道修行と相反する今様を歌つてさえ」という二つが取り上げられている。今様への執心を『梁塵秘抄』の編集に結実させた院も、それが狂言綺語であるという観から自由でなかったことは注目し値する。また、やはり、遊女を一段低いものと見なしていることも見逃してはならない。遊女への特別待遇はほとんど狂気とも言える今様修行のための利己的な手段であり、必ずしも遊女一般に及ぼされるものではなかった。

ところで丹波は『本朝皇胤紹運録』の承仁法親王の項に「仁操僧都女」とあり、仁操僧都は同書によれば、後三条天皇の皇子輔仁親王の子であるので、丹波は皇統ということになる。ただし同書には丹波が遊女であったとは書かれておらず、下崎結は、仁操僧都女というのは別人との混同で、『玉

葉』『山塊記』『華頂要略』（『天台座主記』）によつて、内膳司紀孝資の女であることを考証している。^(注20) さて十二世紀になつて遊女の産んだ子供が摂関家の嫡子となり父親の地位を継いだりすることを以て、当時の遊女の地位が高かつたと見なす論があるが、それは母の出自が問題にならなくなつたためであり、かえつて女性の地位が低くなつたことのおかげであるという理由で、服藤早苗によつて否定されている。^(注21) 丹波もおそらくいわゆる「江口腹」であつて、院の彼女への処遇はそのことと無関係ではないはずだ。男子が摂関家の嫡子となつたと同様、母が遊女であることが負の要因に働かなくなつた時代ゆえ起こり得たことであつたらう。

遊女と宮廷の関わりの早い例として、『大和物語』一四五段、一四六段の宇多法王としろ及び大江玉淵の娘の例がある。後者を「貴族出身の遊女」とする向きもあるが、玉淵が遊女に産ませた子供が女系の世界でそのまま遊女になっていると考へるのが妥当であらう。二者は和歌に秀でていたゆえ法皇に認められたのであり、今様を媒体に僧や院に接近した遊女と同列である。けだし体制に組み込まれていなかったから、遊女や傀儡子が貴族と交渉し宮廷に入りすることもあつたとする加藤周一の指摘は卓見である。^(注22) 後白河院が今様を通じて遊女の地位を高めたとは言えないのである。

このことは院のみならず、他の説話集の編者、そして読者にも共通の認識だつたのではないだらうか。どの話にも「卑しい遊女であるのに」という前提が影を落とす。中で『藤の衣物語絵巻』のかうしゆの産んだ女子が中宮まで上り詰めるという展開は、父親である「若き人」が大政大臣の息子であるためであり、物語の成立した時代背景を反映しているといえるだらう。さらにとねくると普賢菩薩の化身とされる遊女は長者であつた。またかうしゆの子供を長者が「むまこ」と呼んでいることから、かうしゆは長者の娘であることがわかる。いずれ長者を継ぐべき立場であつたはずだ。往生譚がいずれも長者に関わるということも、一般の遊女と一線を画しているという意味において、作者、編者の遊女への視線を考へる上で見逃せないのではないだらうか。『新猿楽記』に登場する十六人の娘のうち、職業を持つのは四女の巫女と、十六女の遊女だけであるが、彼女も長者とされている。客との交渉、接客料の分配など一手に取り仕切つた長者は、遊女の中でも特別の存在であつた。

(五)

遊女へのまなざしの冷ややかさは巫女へのそれと比較する

時、一層明らかになされよう。

『古事談』第三には次の話が載る。

恵心僧都金峯山ニ正シキ巫女アリトキキテ、タダ一人
令レ向タマヒテ、心中ノシヨグハンウラナヘトアリケレ

バ、歌占ニ、

十萬億ノ国々ハ 海山隔テ遠ケレド 心ノ道ダニナラ

ケレバ ツトメテイタルトコソキケ

ト占タリケレバ、滯泣シテ帰給云云。

既に指摘されているようにこの四句形式の歌は『拾遺和歌集』
卷二十哀傷の、

極楽をねがひてよみ侍りける

仙慶法師

極楽ははるけきほどとききしかどつとめていたるところ

なりけり(1343)

を今様化したものである。『和漢朗詠集』『袋草紙』『千載和

歌集』その他に収録され、作者が空也や千観と揺れを呈して
いるところから、広く伝承された歌であったらうと推察され
る。またこのままの形で『梁塵秘抄』二句神歌にも取られて
いる。直接的にはこの二句神歌を四句形式に発展させたもの
と見ていいだろう。

伊藤高広は、歌占は短歌形式が多く、四句神歌形式は珍し
いと指摘した上で、

四句神歌が源信の時代にまでさかのぼれるとは思えない
ので、話自体はフィクションであるが、おそらく院政期
から鎌倉時代はじめにかけて、このようなことが行われ
ていただらうと推察できる記事である。

と述べる。説話自体は院政期のもので、問題は源信が巫
女の噂を聞いて何の疑いもなく、金峰山に向かい、歌占に感
激して帰っている点にある。同じ『古事談』の話であったが、
性空は夢告げに遊女に生身の普賢菩薩を見よと聞いた。信じ
るに足るべき「夢」という装置が必要であったのである。し
かも「周防ムロツミ」の歌を聴いて「成「奇異之思」とあ
る。さらに『十訓抄』になると夢から覚めた時点で「奇異の
思ひをなして」神崎に向かっている。この差は小さくない。
保元物語にも歌占の記事が載る。久寿二年鳥羽法皇が熊野
の証誠殿で夢想を得る。

夜半バカリニ神殿ノ御戸ヲ排テ、白クウツクシク小キ左
ノ御手ヲ指出シテ、ウチカエシク三度セサセ給テ、
「是ハイカニ、く」トヲウセラレケルガ、御夢想ノ告
アリ。

そこで巫女を呼んで占わせる。巫女は権現を降ろそうとする。
寅の時から昼までかかってやっと降りる。

カンナギ、法皇ニ向奉リテ、歌占ヲ出シタリケリ。

手二結ブ水ニヤドレル月影ハアルヤナキカノ世二八有ケル

トテ、左ノ手ヲ上テ、三度、打返く、「是ハ如何、く」

ト申シケレバ、「眞実権現ノ御託宣ナリ」ト思食シテ、

法皇イソギ御座ヲスベラセ給ヒケリ。

歌の意味するところを尋ねると

明年必ズ崩御アルベシ。其後ハ、世ノ中手ノウラヲカヘスガ如クナランズルゾ。

と答える。皆驚いて、さらに明年のいつか尋ねると、

夏ハツル扇ト秋ノ白露トイツレカサキニ置キマサルベキ

「夏ノ終リ、秋ノ始」

と具体的な答えが戻ってくる。涙を流し、畳み掛けるように尋ねる法皇や公卿、殿上人は巫女に全幅の信頼を置いて向き合っている。果たして法皇は翌年七月二日に崩御した。

「手二結ブ」は源公忠に送った貫之の辞世の歌とされる。

『貫之集』を始め、『古今和歌六帖』『拾遺抄』『拾遺和歌集』

『和漢朗詠集』『袋草紙』『宝物集』などに採られ人口に膾炙

した歌であったことが知られる。また『沙石集』巻五には次のような話がある。

恵心僧都は道心が深くて、狂言綺語を憎んでいた。弟子の稚児の中に歌を好むものがあって他の稚児の学問の妨げにな

ると心を痛めた恵心僧都が、里に帰そうと思っていたところ、その稚児は夜更けに縁に出て手水を使って、

手二結ブ水ニヤドレル月カゲウ アルカナキカノ世二モ

スムカナ

と詠じた。時宜になつた歌に心を打たれその稚児を留めた。それをきっかけに考えが変わり、歌を好んで勅撰集にも多く

入集した。「或説」によれば、

世ノ中ヲ何ニタトエン朝ボラケ コギ行舟ノアトノ白浪

という歌を聞いて改心したとも言つ。或説は早く『袋草紙』に見える話である。

「世ノ中ヲ」は沙弥満誓作で『万葉集』に原歌があるが、

公任撰の『新撰髓脳』の「昔のよき歌」の最初に挙げられ、

格調高い歌と認められていたことがわかる。また『和漢朗詠

集』が貫之歌と満誓歌を「無常」に並べて収録していること、

『宝物集』が貫之歌に続けて満誓歌を本歌とする、

世の中を何にたとへん秋の田のほのかにてらす宵のいな

づま(源順)

を載せるところから、この二首を一对のものと思はず意識が働いていたと言えよう。恵心僧都を改心させた歌が、神の託

宣として歌占に用いられているのは興味深い。この歌に内在する霊力を見る思いがする。

『梁塵秘抄』の歌からは、歩き巫女や売春業を兼ねた巫女など、墮落した姿も伺えるが、歌占に視点を当てる限り、その信頼性は遊女の今様より一段勝っているのであった。

今様の歌い手が男性である場合、さらに違いが際立ってこよう。二章で触れたように、当代切つての名手藤原成通が今様で病気を治した話が『古今著聞集』巻六、『十訓抄』下十、『體源抄』十ノ下に見える。『體源抄』は『古今著聞集』の継承であるから、『古今著聞集』を見る。雲林院の端隱の間の階段で蹴鞠の間の雨宿りに何気なく口ずさんだ神歌で、中にいる病人の気分が良くなる。請われて堂に上がって歌った二首の法文歌が、物の気を退散させて病気を完全に治したというのである。うち一首、

いづれの仏の願よりも 千手のちかひぞたのもしき
かれたる草木もたちまちに 花さきみなるときたれば
は『口伝集』、及び『源平盛衰記』巻九でも靈驗効果を現している。管弦歌舞に収められ、

かならず法験ならねども、通ぜる人の芸には、靈病も恐
をなすにこそ。

という標語で結ばれる。芸道の極みを賞讃した話と読んでよい。

『十訓抄』ではやや状況設定が異なっており、乳母の「お

こり」を落とすのに、請われて今様を歌うことになっている。

「君だにも今様遊ばさば、おち候ひなむ」と申しけるに、「やすきこと」にこそ。ただし、おちずは、人をこがましかりなむ」

というやりとりがあるが一種の韜晦と見るべきで、験者も落とせなかつたおこりを今様で落としてくれと頼むほどの乳母の信頼の厚さが重要である。『今鏡』によれば成通は端正に装束を付け碁石を数えながら、一つの法文歌を一晚に百反り、百夜練習したという。『口伝集』にも見える練習方法である。『十訓抄』で歌徳説話の一群の最後に据えられ、

これは和歌にあらねども、ことがら同じきによりて、書
き加ふるなり。

と締めくくられるのも、彼の今様がいかに信奉されたかを物語っているだろう。後白河院も今様を歌って示現を被ったことに関して、『口伝集』に、

ただ、としごろたしなみ習ひたりし劫のいたすところか。
またことに信をいたしてうたへる信力のゆゑか。

と記す。修練を積み、一芸に秀でた人たちがゆえに起こり得たことであつた。

おわりに

遊女の今様は、場に適合した歌詞で、独特の旋律で、また歌い手の声の美しさで、人の心を動かし、時には靈験効果を発することもあったことがわかる。しかし、それはあくまで、「罪深い遊女であつても」という大前提の上で機能している。今様を歌つことを含めて遊女が存在そのものが一旦否定的に捉えられ、改めて今様の徳を讃えるという図式になっている。今様の役割は、「今様を歌つても」と、「今様を歌つから」という二つの違った方向の間で揺れ動いているのである。

注

- 注1 「遊女・傀儡子・巫女と文芸」(岩波講座『日本文学史』第四卷 一九九六年)
- 注2 井川定慶『法然上人伝の研究』(法然上人伝全集刊行会 一九六一年) 善導寺本、高田本の本文は井川定慶編『法然上人伝全集』(同全集刊行会 一九五二年)を参照した。
- 注3 「真宗聖教全書」三列祖部(真宗聖教全書編纂書編 大八木興文堂 一九六四年)
- 注4 『江口・神崎』(至文堂 一九六五年)
- 注5 宮木、宮城両様の表記がある。後拾遺和歌集『新猿楽記』は宮木とし、『遊女記』『二中曆』『名所図会』は宮城であるが、すべて同一人物と見られている。
- 注6 新潮日本古典集成『発心集』頭注

- 注7 今堀太逸「法然の念仏と女性 女人教化譚の成立」(西口順子編『仏と女』吉川弘文館 一九九七年)
- 注8 『宇津保物語』菊の宴に「神歌つたふ」として神楽歌を歌つた例がある。
- 注9 神垣や御室の山の榊葉は 神の御前に茂り合ひにけり(448)。神楽歌は第一句「神垣の」。
- 注10 『今鏡』下「敷島の打聞」に、「四句のかみとうたうたふ」として四句形式の歌が載せられている。
- 注11 中野莊次『校本風葉和歌集』(贅精社 一九三三年)
- 注12 『平安時代物語の研究』(改定増補版 武蔵野書院 一九六三年)
- 注13 『俊一子伝』(歌学大系巻五)には「俊頼の歌我身にそへる影なれやと云名歌をしらびやうしの和歌にうたひけるを」とある。これに関して岩波古典大系『無明抄』の補注には「白拍子がこの歌を歌つたとする」とあるが、「しらびやうしの和歌」は歌の種類ではないかと思われる。
- 注14 今様の旋律の靈験効果については、拙稿「歌」の力 今様の徳を語る逸話を巡って」(『語文研究』第七十三号 一九九四年)に述べた。
- 注15 『藤の衣物語絵巻(遊女物語絵巻)』影印・翻刻・研究(笠間書院 一九九六年)
- 注16 私に漢字を当て句読点を施した。
- 注17 『今様の享受と再生』類歌発生」(『今様のこころとことば』三弥井書店 一九八七年) 初出は『国語と国文学』一九八二年十一月
- 注18 『古事談』の歌は五節資料である京大菊亭文庫本『郭曲』の乱拍子に含まれる。また『撰集抄』の居並ぶ遊女たちが「さくら波たつやれことつと」と囃したという記述は『郭曲』の

助音の注記を生かしたものと思われる。これらの歌謡は正確に言つと今様ではなく乱拍子である。

注 19 『玉葉』『源家長日記』また『藤の衣物語絵巻』にも同様の場面がある。

注 20 「後白河院の周辺 丹波局」(『梁塵』研究と資料 第十三号 一九九五年) また角田文衛も「天台座主記」の丹波が遊女で紀孝資の女であるという記事を引いて「遊女などに産ませし娘と見ゆ」と指摘する(『日本の後宮』学燈社 一九七三年)。
「遊行女婦から遊女へ」(『日本女性生活史』第一巻原始・古代 東京大学出版会 一九九〇年)

注 22 『古典を読む 梁塵秘抄』(岩波書店 一九八六年)

注 23 「神の和歌 神の今様」(日本歌謡研究大系下巻『歌謡の時空』和泉書院 二〇〇四年)

(おおき ももこ・熊本学園大学非常勤講師)